

龍瀬良明 著：

『大縮尺図で見る平野』

古今書院 1988年4月

B5判 238ページ(別図12面) 7,500円

本書は日本の平野を、国土基本図・市町村発行図・圃場整備用設計図等の1:1,000, 1:2,500大縮尺図を用い、1m, 50cm以下の等高線の描出作業によってその全貌を明らかにしようとした実証的な研究業績である。

はしがきで著者自身が述べているように、従来からの中・小縮尺図を用いての平野の記載は、大ざっぱに地形を一つの平坦面と見てとったり、扇状地が三角州かのレッテルを貼るだけのものではしかなかった。しかし大縮尺図の出現によって、自然堤防と後背低地・浜堤・扇状地上の旧河道・土石流堤等の形態的特徴を、25cm, 50cm間隔の等高線の表現により、極めて正確に判読することが可能となった。その結果、水塚(水屋)・堤防・棚田・谷地田・小古墳・条里水田の傾斜度・城の塁堀の立地する自然的基盤が明確となり、歴史地理学・農業地理学は勿論のこと、考古学・農業土壌学等多方面への大縮尺図の果たす役割の重要性が増しつつある。

著者はすでに、『低湿地——その開発と変容』『自然堤防——河岸平野の事例研究』(以上、古今書院)『黒部川扇状地』(大明堂)等の著書によって、地理学界で最も早くに大縮尺図を駆使して、日本の平野の諸特質を歴史的・自然観にもとづく立場から報告している。本書は以上の著作の一部にその後の研究成果を多くとり入れながら、人間の環境としての平野の特色を大縮尺図を通して浮き彫りにしようとした大作である。

本書は序章・付章も含めて6部より構成されている。そして本文の他に著者自身の手で製図・編集の行なわれた12面の大縮尺主題図が折り込まれているので、双方を照らし合わせて読まれることをおすすめする。

序章では、「一条の川 その上・中・下流部——滋賀県・百瀬川——」を取り上げている。百瀬川を序章にした理由は、その上・中・下流の連なり方や河川争奪が単純明快で、後章の河川平野との共通点をもっているからである。

第I部は「扇状地平野の 遍歴」として、第1章

「黒部川扇状地」、第2章「常願寺川扇状地」、第3章「群馬県大間々扇状地」、第4章「松本盆地田多井扇状地——古代の自然水田をさぐる」の4章から構成されている。

第1章の黒部川扇状地は、冷水温・鉄欠・砂質浅耕土等といった物理的自然が、第二次世界大戦以前と以後の時代変化によって、どのように利用され、改変されてきたのかを、独自の地力観をまじえて論述している。別図に示された黒部川扇状地圃場整備前地表面図は、扇状地のほぼ全域が50cm間隔の等高線で表現され、土石流・旧河道等の微地形を判読するのに貴重な地図である。第2章の常願寺川扇状地では、安政洪水によって、立山火山から流下した巨礫が大縮尺図上にプロットされている。本扇状地の供給源山地が安山岩質で、鉄分に富む砂泥が蔦泥として多量に進入したため、花崗岩を供給源とする黒部川扇状地と異なり、流水客土が不要であったことが述べられている。第3章の群馬県大間々扇状地、第4章の松本盆地田多井扇状地の各章においては、扇状地扇端の湧水地点の確定を行ない、地籍図や、遺跡調査による研究成果をもとに、古代水田の立地を中心とした考察が行なわれている。第5章の内部川扇状地では、著者の作成した大縮尺等高線図によって、同扇状地が隆起扇状地であること、マンボはこうした乏水性の土地に立地したものであることを明快にわからせてくれる。本文ではさらに、同地域の水利慣行変容の抗争が述べられている。

第II部は「氾藍原(自然堤防帯)・三角州平野の 遍歴」と題し、第6章「敦賀平野」、第7章「埼玉低地帯の条里水田——浦和市大久保付近」、第8章「石狩平野幾春別川の自然堤防帯」、第9章「津軽平野の多条並列灌漑水路」より構成されている。

第6章の敦賀平野と第7章の埼玉低地帯では、国土基本図や都市計画図をもとに、扇状地から自然堤防帯に移行する付近の微地形配列が50cmインターバルの等高線図によって示され、条里水田や用水路の位置と微高地(自然堤防他)・河道との関係が明らかにされている。荒川中流域における条里水田の立地は、扇状地の扇端湧水を利用したものであり、これまで不明確であった荒川新扇状地の範囲が、この精細な微地形図(別図6)によって明らかになった。しかし、別図(6)と本文は対象地域が不一致であ

る。本文の埼玉低地帯の条里は、別図6で示された荒川新扇状地より下流地域であるが、市史・地籍図・ボーリング資料等を加味しながら、その用水源が古荒川もしくは大宮台地からの小河川のいずれかによるものであるとして、興味深い考察を加えている。

第8章の幾春別川の自然堤防帯では、山地から流れ出た幾春別川は砂泥質の扇状地を形成しているが、河道に沿う高まり自体は扇状地上の自然堤防であると述べている。当該地域では米の減反政策により玉葱の主産地が形成され、自然堤防背後の緩斜面低地にまで作付地が拡大している。著者はそのことにふれ、「商品としての玉葱の需給関係を中心とする社会的・現実的条件の変化があるとき、理想の土壌だけではなく、隣接するやや不適とされてきた土壌の土地へも玉葱畑が飛び火したのである」としている。評者の研究についてふれておられるので、一言付け加えさせていただくならば、減反政策によって、自然条件の差をこえて一律に玉葱畑になったことは著者の報告通りであるが、自然条件（土壌条件）の差が、個別経営ごとに収益率の差を生み出していることを指摘しておきたい。

第9章の津軽平野の多条並行水路は、地表傾斜の緩やかさ、排水の悪さと低湿性、著しい用水不足等を解消する目的でつくられたものであった。著者によって分類された扇状分岐型・電話回線型等の珍しい水路網は、1970年代以降に開始された圃場整備事業の着工まで残存・利用されていた。別図8に示された主題図は、その配列を示すものであるが、10cm間隔の等高線図上に表現されているので、微地形との対応関係を正確に読み取ることができる貴重な資料となっている。

第三部「旧湖底・湖岸低地の遍歴」では、第10章「茨城県飯沼の享保干拓時の湖岸線」、第11章「北浦・霞ヶ浦岸の条里水田」より構成されている。

第10章の飯沼は、江戸時代の新田開発によって1,525町歩余りの水田が形成されたが、干拓以前の湖面高、湖岸の位置が、地元秋葉家の所蔵する享保9年作成の「飯沼境耕図」（著者仮称）と、近年の圃場整備用1:1,000地図によって明らかにされている。「飯沼境耕図」は当時、湖沼と周囲の土地との境界を区別するために作成されたもので、この境界（抗線）を今日の大縮尺図におとすことで、干拓以前の飯沼の湖岸線を復元することができた。復元の結果、当時の湖面高は標高約10.7mで、飯沼新田

の現在の水田面は勿論のこと、水田地帯の両側に連なる屋敷地帯は、湖面すれすれの高さのデルタの頂置面であることが明確にされている。

第11章の北浦・霞ヶ浦の条里水田は、地籍図、建設省霞ヶ浦工事事務所1:2,500地図を用いて、縄文海進最高海水準期に堆積された土地に条里水田が立地していることを論じている。別図10を参照すると、条里型区画は沖積段丘化した海岸平野上にのみ立地し、堤防がなければ現在も冠水する標高約2m以下の低地には存在しないことに読者は気づくであろう。著者も指摘する通り、本文中の図で、条里水田が北浦側に多く、霞ヶ浦側に少ないのは、今後の検討を要する課題である。この点について、常陸国では郡家の近くに条里が存在するとする豊崎卓の説をもとにするならば、行方郡の郡家に近い北浦側により多くの条里が存在しても不思議はない。評者は、霞ヶ浦では大中河川の流入や南岸を中心にみられる洪積台地の多島海的分布等によって、縄文海進最高海水準期に複雑な微地形が形成されたのに対し、北浦ではそうした影響から隔絶され比較的単調な海岸平野が形成されたことが、条里水田立地における一つの自然的基盤をつくったのではないかと考える。

第四部「台地・高原の谷地田遍歴」は、第12章「信濃川べり川口町における圃場整備の地形条件」、第13章「名護屋溶岩台地の谷地田」、第14章「木曾川久田見高原の谷地田」より構成されている。

第12章の信濃川べり川口町では、旧自然堤防のをせる河岸段丘上の水田灌漑の特色について黒部川扇状地との相違を述べている。また、第13章と第14章では、従来より、名護屋溶岩台地は玄武岩台地、久田見高原は隆起準平原としてのみしか地形分類が行なわれていなかったが、台地を浸食する谷地田の等高線図（別図11・12）が著者によって作られたことにより、遷急点の位置、谷頭部の溜池の存在等が明らかとなった。これらのことから、名護屋城と諸大名の陣屋の使用水は谷地田の水を必要としたことや、近年の谷地田の圃場整備事業をとりまく自然環境の特色が詳細に論述されている。

以上のように、本書では大縮尺図の編集・等高線図の作成を通して得られた情報をもとに、各章ごとに独立した、いわば“歴史地形誌”が語られている。そして、その背後に著者の主張を貫くものが、付章において述べられている“歴史的自然観”である。著者が、「人間の環境としての自然が、背後の強力

なインパクトで行なわれる変化の方にこそ、もっと注目しなくてはならない。歴史が変化してやまない以上、すべての自然は人間の環境としての意味を変えてゆくのだから」と指摘するところに、学際科学としての地理学の独自性を主張する際の道標が与えられたように思う。かかる歴史的な自然観は付章に入らず、むしろ序章、まえがき等の部分に入れた方が、読者に与える印象はより鮮明なものとなったのではないかと考える。

著者によって確立された、大縮尺図を用いた「歴史的な自然観」にもとづく地理学を継承し発展させてゆくには、様々な分野での応用が考えられるであろう。評者が専攻する農業地理学の分野から論ずるならば、著者の主張する微細な等高線図に加えて、大縮尺図を用いた一筆ごとの水田・畑の土地（土壌）条件、土地利用、土地所有を重ね合わせることで、個別経営単位の微細な空間が浮き彫りにされるであろう。その意味でも本書は、自然地理学、人文地理学の分野・専攻を問わず、大縮尺図の応用範囲を示唆するきわめて有用な書である。

大縮尺図を用いると言っても、例えば霞ヶ浦や北浦沿岸全域を1:2,500地図で表現するには、著者も述べておられるように、B全大判図面が100面以上必要である。一面ごとに25cm、50cm間隔の等高線を赤の油性ペンでなぞり、縮小、製図する編集上の作業は熟練技術に加え、大変な労力と根気を必要とする。これら全てが、本年喜寿を迎えられた著者個人によって完成されたことに、著者の地理学への熱い想いが感ぜられる。

文章は平明でわかりやすく、目的から結論に至るまでの思考が述べられ、著者の研究にまつわるエピソード、思い出が随所にはさみ込んであるため、初学者や地理学以外の専門分野の人々にも親しみやすい内容となっている。

この書物が地理学者のみならず、歴史学・考古学・農学等、隣接・関連諸科学の分野の人々にも読まれることを希って筆をおく次第である。

（田野 宏）

穂本洋哉 著：

『前工業化時代の経済——「防長風土注進案」による数量的接近——』

ミネルヴァ書房 1987年2月

A5判 242ページ 3,000円

ここ十数年来、日本の明治時代以降の急速な近代化・工業化の起源を江戸時代後期に求め、江戸時代の社会・経済を再検討してゆこうとする試みが盛んになりつつある。新しい経済史、ないしは数量経済史を標榜する人々の研究がそれである。本書はその潮流にそった代表的な研究の一つとして位置づけることができる。

本書は、著者が過去十数年来公表してきた長州藩の藩領経済に関する諸論文をもとに、新たに書きおこされた論考を加えて構成されている。本書のテーマは、まえがきにもある通り、「工業化前夜におけるわが国の経済はいかなる状態にあったか。達成された経済水準と構造、およびその特質を見極めること」である。そして、対象地域としては防長地方が選ばれ、長州藩が天保期（1840年代）に実施した経済調査の結果である「防長風土注進案」が主な研究資料として用いられている。本書の特徴は、この「防長風土注進案」を縦横に用い、マクロ経済学の所得勘定計算の手法を応用し、一藩領経済を、生産・租税・財政、支出（消費・投資）の三側面にわたって総合的に分析した点にある。従来の経済史研究では、この様な試みはほとんどなされてこなかっただけに、全く新しい画期的な研究であり、その作業量の膨大さからして大変な労作であるといえよう。

また本書は、経済史の著作であり、論旨は既述のような経済史の問題意識によって貫かれている。しかし、農業や農家副業、あるいは消費生活の個別事例研究においては、長州藩内の地域（宰判）差の分析に重点がおかれ、テーマとしても土地利用効率や農法、水利施設の整備の問題が取り上げられるなど、歴史地理学的にも十分に評価されるべき内容を持っている。

本書の内容は、大きく、生産分析、租税・財政分析、支出分析の3部に分けられる。その構成と各章の内容は次のようである。

第1章 序論：近世経済の位置づけ

第I部 生産分析

第2章 防長地方の農業生産

第3章 田地2毛作農業の確立とその基盤

第4章 近世期の農業発展：田地農業と畠作農業

補論1：防長地方の農業生産関数

第5章 非農業生産、非農化現象

第6章 木綿織と製紙：農村起源の非農業